

〔書 評〕

モハメド・オマル・アブディン著  
(聞き手・構成 河路由佳)  
『日本語とにらめっこ—見えないぼくの  
学習奮闘記』

(白水社, 2021年4月30日発行, 縦書き 218頁)

橋 内 武

子どもの将来にチャンスを与えるのが教員の仕事だ。—M. O. アブディン

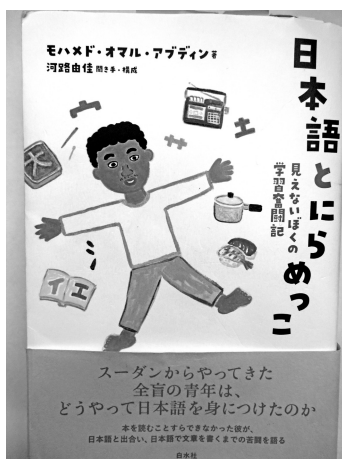


写真1 『日本語とにらめっこ』の表紙

## 0. はじめに

## 0.1 書名・著者・構成

本書『日本語とにらめっこー見えなほくの学習奮闘記』は、スーダンから来た全盲の留学生モハメド・オマル・アブディン (Mohamed Omer Abdin) が、「いかにして日本語を自らもっとも得意とする言語にしていっただか」という問いに答えた日本語習得過程の記録である。(なお、「全盲」「盲人」などの差別語が出てくるが、著者自ら本文中で使用しているため、言い換えはしないことにする。) これは、帯(裏)にあるように、「ぼくが日本語とにらめっこした20年間の奮闘の記録」であるという。オンラインでインタビューをしたのは、日本語教育学者の河路由佳である。(これには、編集者の轟木さんも加わった。) この元東京外国語大学大学院教授(現杏林大学外国語学部特任教授)は、かつて似たような手法で『ドナルド・キーンーわたしの日本語修行』(白水社, 2014)を世に送り出している。それゆえ、河路先生による問いに、全盲のアブディン君が饒舌に答えながら進んで行く本書も、日本語教育関係者が関心を寄せる「日本語学習奮闘記」であろう。なお、外国で生れ育ったキーンさん(1922～2019)にしろ、アブディン

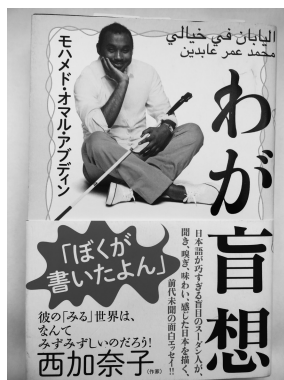


写真2 『わが盲想』の表紙

ン君(1978～ )にしろ、出身国・世代・専門分野のいずれも全く異なるものの、現代の日本に帰化した点では共通している。

いま親しげに「アブディン君」と書いたのは、わけがある。3つの名前を連ねた正式名では長すぎるから、呼び名はどれか一つで十分だろう。本人が『わが盲想』(ポプラ社, 2013年, 2015年に文庫化)の「はじめに」で書いたように「モハメド」は、イスラム圏

## アブディン『日本語とにらめっこ—見えないほくの学習奮闘記』

に掃いて捨てるほどいるから、同名の別人とは区別し難い。「オマル」は幼い頃に使ったアレ（御虎子<sup>おまゐる</sup>）を連想させる。そこで、「アブディン」と呼んでくれというのである。

著者アブディンの筆致が機知とユーモアに富むことは、本のタイトルからして一目瞭然である。「日本語とにらめっこ」は、晴眼者にしかできそうにない面相遊戯であるが、副題にそれとは相反する「見えないほくの～」という修飾語句を添えているのが面白い。表紙には、大の字になった男（アブディン）が部首と挿絵に囲まれながら、漢字を学習している様子が見て取れる。なお、デビュー作のタイトル『わが盲想』にある「盲想」は、「妄想」と掛けた著者独自の造語であり、決して「妄想」の誤記ではない。

構成は聞き手の河路由佳によるが、はじめに（モハメド・オマル・アブディン）とおわりに（河路由佳）を挟んで、本書の本文は全4章からなる。内容は第一作『わが盲想』と一部重なるところもあるけれども、日本語学習に絞ったことが前作との明らかな相違点である。

第1章 文字を知る

第2章 声から学ぶ

第3章 コンピュータに出会う

第4章 文章を書く

なお、章と章の間には、「モハメド君の思い出」が、彼のお世話をした①高瀬公子さん、②荒川清美さん・義弘さん、③大森哲實さんによって語られている。いずれもインタビューから書き起こしたコラムである。

## 0.2 著者の年譜

巻末には、「スーダンからやってきた全盲の青年」モハメド・オマル・

アブディンの年譜が載っている。これが大変興味を引くので、以下に抜き書きしつつ、引用しておこう。括弧内は評者橋内による補筆である。

著者の生い立ちと学歴は、つぎのとおりである (pf. 216)。

- |       |   |
|-------|---|
| 1978年 | スーダンの首都ハルツームに生れる。幼少期から弱視。12歳で視力を失う。(兄も全盲である。)                                     |
| 1997年 | ハルツーム大学法学部に入学するも、政治状況の悪化で大学は閉鎖状態であった。(1989年以來バシール政権下に。)                           |
| 1998年 | 国際視覚障害者援護協会の招聘で来日、福井県立盲学校高等部専攻科理療科に入学。鍼灸・マッサージを専攻し、日本語の点字を学ぶ。(週5日は寮生活、週末はホームステイ。) |
| 2001年 | 福井県立盲学校高等部専攻科理療科を(首席で)卒業。<br>筑波技術短期大学情報処理科に入学、コンピュータと音声読み上げソフトの使用を習得。(2年後に中途退学。)  |
| 2003年 | 東京外国語大学外国語学部日本課程日本語専攻に入学。   |
| 2007年 | 東京外国語大学外国語学部を卒業。<br>東京外国語大学大学院地域文化研究科国際協力専攻平和構築・紛争予防専修コースに進学。                     |
| 2009年 | 東京外国語大学大学院修士課程修了後、総合国際学研究所博士後期課程に進学。  |
| 2014年 | 東京外国語大学から博士号を取得。  |

アフリカはスーダンのハルツーム大学法学部から、日本人生徒しかいない福井の盲学校高等部専攻科(鍼灸・マッサージ)に入り直す、という学歴が珍しい。その後筑波の短大(情報処理学習)へ、さらには大都会・東

京の大学へ（東京外大），大学院（東京外大大学院）へというふうに紆余曲折を経て、いまでは都内の大学に籍を置く研究者になっている。研究テーマは、「スーダンの南北紛争の歴史」であるという。ここに至る永年の努力が並大抵のものではなかったことは、本書からも窺い知ることができる。

だが、視覚障害者であるがゆえに、増強された能力がある。それは周囲の環境に影響されない集中力である。オンラインでの編集会議中、部屋が日没後の闇で漆黑になっても、アブディンのパソコンからは澁刺と答えていく声が聞こえてきたという。それは、江戸時代の国学者・塙保己一の逸話を彷彿するものがあつた。日が暮れて読書ができなくなった晴眼者に呆れて「さてさて、目あきというものは、不自由なものだ」と言ったという有名なエピソードである（p. 213）。

巻末の年譜には、資格や受賞歴なども挙っているので、付け加えておこう。

2001年 日本語能力試験一級を取得，鍼師・灸師・マッサージ師国家資格を取得

2007年 任意団体「スーダン障害者教育支援の会」を立ち上げる

2008年 「スーダン障害者教育支援の会」（CAPEDS）（アブディン代表理事）がNPO法人に

2014年以降の研究者としての経歴（p. 217）は以下のとおりであるが、文化庁長官表彰は特筆すべき榮譽であろう。

2014年～17年 東京外国語大学世界言語社会教育センター特任助教。

2017年～20年 学習院大学法学部特別客員教授。

2017年 文化庁長官表彰を受ける（文化発信部門）。

2020年～現在 東洋大学国際共生社会教育研究センター客員研究員。

東洋大学では、共同研究プロジェクト「アジア・アフリカにおける地域に根ざしたグローバル時代の国際貢献の手法の開発」に参加している。

肩書きには「特任」または「客員」が付き、専任教員という安定した地位は得ていない。2021年現在、参天製薬株式会社企画本部CSR室に勤務する傍ら、上記客員研究員を兼務している。趣味はブラインドサッカーであり、「たまハッサーズ」のストライカーとして活躍している。

以下、本書の構成に沿って、各章の内容を詳しく紹介しつつ、それぞれに若干のコメントを加えていく。一般的に子どもの言語習得を記録する場合には、音声から文字へと進むのだが、本書では逆に文字（特に点字）から音声へという順序で展開する。インタビューで取り上げる当事者が、「外国出身の盲人研究者」であり、言語学習上特異な経過を辿ったからである。

## 第1章 文字を知る

### 1.1 アルファベットと点字との出会い—スーダンでの言語学習

スーダんに生れ、19歳までその首都ハルツームで生活したアブディン君は、幼少期から弱視であったが、12歳の頃にはすでに全盲であったという。小学校の頃には、大きなアラビア文字が読めた。だが、中学校で英語を習い始めた頃には、アルファベットの大きな文字は見当がついたものの、アラビア文字の方は、右から左へ書き繋げるため、もはやお手上げであったという。しかし、盲学校には行かず、ふつうの学校に通った。教科書は友だちに読み上げてもらい、それを必死で暗記した。そのため、記憶力が大いに鍛えられたのであった。

アブディン君は全盲という逆境にあっても努力を重ね、全国共通の高校卒業試験を受験、好成績で合格した。その結果、1997年、スーダンの最高学府であるハルツーム大学の法学部に入学できたのである。法学部を選んだのは、弁護士になるという目標を叶えるためであった。ところが、政治状況の悪化により、入学2か月後、大学は閉鎖してしまう。

それでは、身体的にも環境的にも勉学が困難な状況にあった彼が、いか

にして点字に出合い、それを覚えたのであろうか。中高生の頃には、視力を失った自分を受け入れられず、自力で英語とアラビア語の本が読めるようになりたいと願い、点字の学習を始めたという。目の前に本があっても読めないのは、「宝の持ち腐れ」であり、「書物をしょってるロバ」（比喩表現、『コーラン』からの引用）であったからだ。

点字は6点からなるが、ハルツーム大学への入学直後には、それを暗号に使っていた程度であった。そこに舞い込んできたのが、日本留学の話である。「日本の国際視覚障害者援護協会」（以下、協会）が留学生を募集しているという。半信半疑ではあるが、応募することにしたのだ。（なお、来日して知った漢字点字は8点からなるが、未習のみである。）

一次試験は、点字と英語であった。点字の出来は悪かったが、英語の成績は良かった。幸い、一次試験合格者4人の中に入った。それから2日間、日本から来た協会理事長による点字の特訓がなされた。五十音の発音に合わせて、点字の特訓が始まったのである。日本語の凄いところは、五十音さえ読めれば、かなで書かれたものならばすべて読めるようになることであるという。英語では、そうはいかず、例えば r-i-g-h-t のように、文字と音の関係はしばしば一対一の対応をしていない。黙字(mute)もある。他方、日本語では、「み」と「ぎ」が読めたらば、「みぎ」が読めるのだ。

二次試験は面接であった。問われていた十桁の数字を間を擱いて復唱できた。「そのような記憶力が合格に繋がったのだろう。」と本人は想像する。

## 1.2 東京の協会事務所から福井の盲学校へ—日本語を点字で学ぶ

母国スーダンでの日本留学試験に「トライ」したところ、アブディン君一人選ばれて、翌年1998年1月には日本に「渡来」したのである。まずは、東京は板橋にある協会事務所で、全盲の在日理事長から個人指導で日本語の点字を学んだ。教科書は海外技術者研修協会編『日本語の基礎』の点字

版であり、4巻まで読み上げた。内容はさておき、これで日本語を点字で読む楽しみを覚えたという。結果的に、日常会話の基本は、何とかできるようになっていた。日本語学習といっても、文字との出会いは、点字から始まったのである。そこが、晴眼者との明白な相違点である。

2月下旬には、国立塩原視力障害センター（当時）で日本語の試験（点字版）を受験した。それには日本語能力試験一級の過去問が出た。N4の力しかない留学生にN1の試験が課されたようなものである。皆目見当がつかず、泣いてしまったという。悶々と過ごしていたところ、3月末に至って福井県立盲学校が入学を許可してくれるかもしれないとの話が浮上。急遽4月1日に面接試験を受け、1年間の仮入学という条件つきで合格したのであった。問題は、学校の寮は5日制であり、土日は寮以外の所で寝起きしなければならない。幸い、盲学校職員の荒川清美さんがホームステイを引き受けてくださるということで、問題は解決した。息子二人がいる荒川家は、外国人のホームステイには慣れていたのである。

### 1.3 福井県立盲学校時代—日本語能力試験一級合格に至るまで

盲学校では、全盲の窪田先生（本書出版を前に2021年没）が、マンツーマンで点字の速読法を教えてくれた。鍼灸とマッサージの国家試験合格に向けて、点字を読むスピードを上げる必要があったからである。ある程度できる「英語」の代わりに、荒木先生が「国語」の力を強化すべく、点字教科書「高校国語」を手に入れた。その教科書に載っていた文学教材（芥川龍之介の「羅生門」や夏目漱石の作品からの抜粋）を読んだ。

しばらくすると、アブディン君が「日本語能力試験二級合格を目指して日本語の復習をしたい」と言うので、盲学校職員の高瀬公子さんが毎週土曜日の午後2時間程、個人指導をしてくれた。使用した教科書は、*Situational Functional Japanese*（凡人社）、及び『中級の日本語』（ジャバ



ンタイムズ)と『実力アップ—日本語能力試験二級』(UNICOM)である。1999年12月に受験。点字による日本語能力試験二級は、東京で行われた。

結果、二級に合格。つぎは一級に挑戦した。漢字圏からの留学生のような漢字力を持ちたいと願って、漢字学習にも力を入れた。高瀬先生は、①子ども用のカタカナの本を貸してくれて、溝の部分を何度もなぞってその形を覚えるという宿題を課した。また、②油粘土に割り箸で溝を掘りながら漢字の形を触覚で記憶する方法を指南した。こうして代表的な部首(ニンベン、ウカンムリ、ナベブタ、サンズイ、リッシンベン、シンニューなど)を習得した。特に、<sup>うじ</sup>氏を表す漢字の知識は、初対面の人の漢字名理解と話題づくりに役立った。漢字の部首は、R. Jakobsonの言語機能説で言うところの、メタ言語的機能を果たす。

字を耳から学ぶため、同音異義語や類音異字語に敏感になり、「おやじギャグ」(洒落)を使うなどのことば遊びを覚えた。例えば、「スーダンは日本より数段広く、数段暑い」「コンゴ動乱は言語道断」などの駄洒落表現である。洒落を愉しむ者同士ならば、「<sup>とり</sup>鶏はどうですか」「とりあえず」「とりとめもない話で」といったトリ技で掛け合いをするのだ。日本語の豊かな詩的機能に着目してのことである。

福井の盲学校理療科では鍼灸マッサージを学んだが、その学習は字音語の専門語に満ちていた。解剖学の時間には、用意された人体模型に手で触れながら学習した。例えば、「<sup>けいぶ</sup>頸部」「<sup>ようぶ</sup>腰部」「<sup>がい か</sup>外踝」である。それぞれ、日常語(字訓語)の「<sup>くび</sup>首」「<sup>こし</sup>腰」「<sup>そとくるぶし</sup>外踝」に対応する(『わが盲想』pp. 101-104)。身近な日常語よりも、解剖学の専門語を先に覚えたのだ。

さて、高瀬先生の考えで、文法・読解・聴解の方は、『テーマ別 中級から学ぶ日本語』(研究社)を用いた。併行して、福井の点字図書館から録音図書を借り出して、活用した。例えば、三浦綾子の『氷点』や天童荒太の『永遠の仔』などである。『テーマ別 上級で学ぶ日本語』(研究

社)と『実力アップー日本語能力試験一級』(UNICOM)にも取り組んだ。2000年12月に東京で一級を受験し、見事、優秀な成績で合格した。なお、アブディン君は歌謡曲が好きで、高瀬先生は歌詞(谷村新司の「昴<sup>すばる</sup>」など)の点訳を手伝ってくれた。

以上のような経過を辿って、アブディン君の語学力は日本語で夢を見るほどのバイリンガルに上達した。そこで、聴解力の実力を試したいという本人の希望で、臨床心理学者河合隼雄の講演会にも出掛けたのだ。笑いを誘う個所ではみんなと一緒に笑っていた。福井県立盲学校時代、週末毎に特訓をした高瀬公子先生曰く、アブディン君からは「やる気と打てば響くような反応」(p. 78)があって、先生自身の指導力が引き出されたという。

## 第2章 声から学ぶ

### 2.1 録音図書で読書

アブディン君の母語はアラビア語であるが、来日以前には教科書以外の本を読む機会は皆無に近かったという。しかし、日本の公共図書館にはテープライブラリーがあることを知り、録音図書(朗読テープ)を週末毎に借り出しては、文学作品を聴いて「読書」をしたのである。とりわけ、夏目漱石を愛読した。『我輩は猫である』『坊っちゃん』『三四郎』『こころ』を含む一連の名作に熱中した。意味不明な単語は、工業高校教諭の荒川義弘さん(荒川清美さんの夫)が、文脈を踏まえて教えてくれたのだ。

他方、点字図書館も活用したが、その朗読テープも大いに役立った。特に共感を覚えたのは、三浦綾子の『銃口』である。スーダンの内戦を経験したアブディン君にとって、国家主義による思想統制・徴兵・復讐・制裁などを含む戦時下の状況には真実味があるという。また、高瀬先生の勧めで、遠藤周作の作品も読んだ。『深い河』と『狐狸庵先生』がまさか同じ著者の作品である、とは信じられなかったようだ。三宮麻由子の『鳥が教

えてくれた空』には大いに触発されて、全盲の自分もいずれエッセイストに、という夢が膨らんだ。

## 2.2 多様なジャンルとバラエティー

「声から学ぶ」と言えば、ラジオ・テレビが身近なメディアである。例えば、野球の実況放送（特に、民放アナウンサー山田透と解説者江本孟紀の掛け合い）や漫才（オール阪神・巨人、爆笑問題）・落語（特に、本題前の「枕」）などの話芸から、笑いを誘う話術を学んだのである。歌は歌詞が明瞭な歌謡曲（特に演歌）が好きで、女性では美空ひばりや山口百恵、男性では谷村新司や前川清をよく聴く。テレビでは、「あすか」や「さくら」など、ヒロインが活躍する朝ドラ（副音声付き）も視聴した。時の政治家（小泉純一郎など）の言い癖を真似して、人を笑わせることもできる。方言と例えば、生活の場で様々な福井弁や関西弁（大阪弁）を覚え、旅先で東北弁や伊予弁を耳にして、それぞれの特徴に気付いたという。

以上のように、著者のアブデイン君は多様なジャンルとバラエティーの日本語に浴びるように接して、ことばの財産を殖やしてきたのである。この「日本語学習奮闘記」は、S. Krashen の提唱した「インプット仮説」(i + 1) が証明され得る好事例だろう。

## 第3章 コンピュータに出会う

### 3.1 筑波技術短大で情報リテラシーを獲得

福井の盲学校から筑波技術短期大学情報処理コース（3年制）へ進学したのは、「パソコンという魔法の箱の謎が解ければいいなと気軽に考えた」（『わが盲想』p. 134）からであった。だが、入学してみると、その基本操作は既習という前提で授業はどんどん先に進められた。その結果、プログラミングや情報処理の専門科目が理解できず、ついていけなかった。次々

に現われる記号の密林に前進を阻まれたのである。日本語の問題というよりも、ICT 初心者には内容が難解であったからだ。それゆえ、2年で中途退学である。

それでも、一般ユーザーが使える程度の情報リテラシーは身に付け、言語生活に「革命」を引き起こした。福井で覚えた点字に加えて、筑波では新たにパソコンを駆使して、点字以外の文字（漢字とかなとローマ字）による読み書きができるようになったのは大収穫である。

### 3.2 東京外国語大学へー多様なソフトと適切な環境

筑波で酷く落ち込んでいたときに、言語と地域研究を学ぶ大学が東京にあることを知り、受験することにした。ひたすら日本留学試験の対策をして、東京外国語大学を受験。幸い合格し、翌年の2003年4月にその日本課程日本語専攻に入学した。有り難いことに、大学は全盲の新入留学生のためにさまざまなパソコンソフトと適切な環境を用意してくれた。生活する学生寮の手配もしてくれた。東京外国語大学は、好きな文学も関心のある政治も幅広く学べる点で、自分が望んだ大学であった。折も折、スーダンのバシール政権が倒れた時期であったので、2年次に決めるゼミは迷うことなく「アフリカ地域研究」を選び、スーダンの南北紛争について多角的に調べ始めた。卒業論文のテーマは「南スーダンの現状」にした。

企業への就職を果たす同期生を尻目に、2007年に卒業後、直ちに大学院に進学。研究者への道を目指して、歩み出した。その年に立ち上げた任意団体の「スーダン障害者教育支援の会」(CAPEDS)を翌2008年にはNPO法人化し、代表理事におさまった(『わが盲想』第9章)。2009年修士課程を修了、博士課程に進学。博士課程1年が終わった2010年の春休みに、同胞人女性アワティフと「スピード違反婚」(同書第10章)。妻帯した翌年3月、東日本大震災直後の不安の中で第一子(長女)が誕生した(同

書第12章)。努力した甲斐があり、2014年には博士の学位を東京外国語大学から取得した。すでに34歳になっていた。

職歴は学位取得後、都内の大学で「特任助教」「特別客員教授」「客員研究員」を次々に経験してきた。「渡来」20年を画した2018年には、満40歳を祝った。2021年4月現在三児の父である。「半日本人」と題する連載エッセイを書く帰化日本人は、もはや青年「アブディン君」ではなく、国際政治学者「アブディン先生」と呼ぶべきであろう。

### 3.3 情報機器とソフトの活用

全盲学生のアブディン君は、大学での学びにコンピュータをどのように使ってきたのであろうか。入学に当たって東京外国語大学が準備してくれたのは、1. パソコン、2. 音声読み上げソフト、3. テキストを点字にする機器。その上、テキストをスキャンしたり、点字にしたりするための視覚障害者学習支援室を用意し、週4日来室するサポート要員の配置までしてくれた。進学した同大学院でも手厚い支援があった。

音声読み上げソフトを活用すれば、パソコンを使って誰とでもコミュニケーションがとれるし、インターネット利用での確な情報を即座に入手できる。また、ブレイルノートまたはブレイルメモにテキストを入れると、すぐに触って読める点字に換わる。テキストデータさえ受け取れば、点字変換も可能であり、読み上げソフトで聴くこともできる。授業の資料を事前にテキストファイルで入手できれば、直ちに予習ができて助かったという。現在では、サピアやブックシェアといった視覚障害者用のウェブサイトから必要なテキストデータを得ている。

自宅では、ニュースをインターネットで聴いている。iPhoneを使えば、アクセシビリティの音声ソフトが指定した言語(日本語・英語・アラビア語)で読んでくれるのである。情報アクセスへの有り難いツールではある。

## 第4章 文章を書く

### 4.1 著書とエッセイ

目の見えないアブディン君は、どのようにして文章を書いてきたのだろうか。日本語の原稿はパソコンで作成する。漢字はコマンドを「詳細読み」にすると、該当する漢字を音声で明示してくれる。それを聴いて、漢字を選択する。例えば、「ごとうさん」と打って変換キーを押すと、機械が「前後のゴ」「藤の花のフジ」などと音声化してくれるので、正しい漢字が読み上げられたときに、エンターキーを押す。アブディン君自身が文章を書いていると、それが音声として聞こえてくるのだ。書き出したならば、一気呵成に書き上げる。自分自身の中から湧き出てくるものを、分かりやすく書くのが鉄則であるという。

2013年刊の『わが盲想』は元来、ポプラ社のウェブマガジン「ポプラビーチ」(2012年6月～2013年4月)に連載された一連の記事を加筆修正したものである。帯(表)にあるとおり、このデビュー作は、「日本語が巧すぎる盲目のスーダン人が聞き、嗅ぎ、味わい、感じた日本」をユーモアある筆致で描く。別にゴーストライター(代筆者)がいるわけではなく、パソコンの音声読み上げソフトを自ら駆使して書き上げたものである。なお、二作目の本書『日本語とにらめっこ』は、冒頭でも紹介したとおり、聞き手と話し手に編集者が加わって、2018年早春から2020年夏にかけて実施された、6回のオンライン・インタビューを書き起こしたものである。

2点の著書に加えて、エッセイの方も好評である。新潮社の『考える人』2015年秋号(特集「宇宙」)に書いた、「ぼくを見守るお月様」は、2016年のベスト・エッセイの一編に選ばれた。現在ポプラ社のウェブサイト「半分日本人」というエッセイをアップし、日本アラブ協会の『季刊アラブ』に年4回連載し、『点字毎日』でも視覚障害者対象の依頼原稿を書いている。

アブディン『日本語とにらめっこ—見えない多くの学習奮闘記』

だが、彼自身はエッセイストではないと言う。曰く、エッセイストであるためには、毎年1冊以上エッセイ集の出版を重ねるなど、執筆活動に邁進する必要があると考えている。

## 4.2 研究テーマと論文

アブディン先生の本業は研究者であるから、先行研究を調べたり、調査研究をしたりした上で、論文執筆に取り掛かる。晴眼者に比べて不利な条件がある中で、アブディン先生はスーダンの紛争史を引き続き研究している。

研究者情報によれば、英文の博士論文(2014)“The Impact of the Sudan’s Intra-North Power Struggle on the North-South Conflict: Historical Analysis of Post-Independence National Regimes’ Approaches to Conflict Resolution”は別として、論文も日本語で発表することが多い。代表的な論文としては、「バシール政権崩壊から暫定政府発足に至るスーダンの政治プロセス—地域大国の思惑と内部政治主体間の権力関係—」(アフリカレポート, 2020, 58号, pp. 41-53)がある。(御存知のとおり, 2019年4月陸軍出身者によるバシール政権が崩壊, 同年8月に軍と民主派勢力による暫定政権が発足したものの, 2021年10月には軍事クーデターにより暫定政権が崩壊した。)競争的研究資金による研究課題(2018年~2021年)は、「ナイル川の水資源の配分の交渉プロセスの解明: 中東政治変動との関連に着目して」である。いずれ研究書も日本語で著わされることだろう。

### むすびに代えて

以上、インタビュー形式によるアブディン・川路(2021)からどのような結論が引き出されるだろうか。本書『日本語とにらめっこ—見えない多くの学習奮闘記』は、全盲外国出身青年による日本語の学習・習得の成功

事例である。本人の努力は並大抵なものではなかったと想像するが、渾身の努力の成果ともいえる学習方法論を世に問うことができたのである。ここには、視覚障害者である一外国人による日本語習得の軌跡を通じて、第二言語としての日本語習得の秘訣が読み取れるのではなかろうか。

1. 通常の文字が読めなくても、その障害を視覚障害者は抜群の記憶力で克服させることができる（本書 p. 15）。
2. 最初から点字で学んだため、晴眼者の外国人が直面する漢字学習の障壁がなく、聴覚と触覚による言語習得の結果、障害者としての日本語の上達が速かった（本書 p. 33）。点字の辞書は使わなかった（p. 83）。
3. 文字の形は、粘土や箸を活用して触覚を頼りに学習することができる（本書 pf. 52）。
4. 点字図書館から録音図書を借り出せば、文学作品を次々に聴いて、読破することができる（本書 p. 52, pp. 81-84）。
5. テキストデータさえあれば、テキストの読み上げソフトで聴くことができる（本書 p. 151）。それゆえ、漢字の障壁は吹き飛んでしまう。むしろ晴眼者の方が漢字学習に抵抗があるのだろう（本書 p. 63）。
6. テキストデータがないと、学習と研究に差し障りが出てくる。著書や論文の電子データがないと、先行研究を読むことができない。視覚障害者は世界の全出版物の2～3%しか読めない、「本の飢餓」（book famine）状態に晒されているのだ（本書 p. 165）。でも、「なんで見えるのに本を読まないやつがいるんだろう」（p. 23）とは、晴眼者への痛烈なコメントではある。
7. 熟語や定型句・引用句を覚えて、それらを適宜使用すると、教養の広さと高さを示すことができる。本書から例示すれば、四字熟語「言語道断」「自宅待機」「中途退学」、（解剖学の）専門用語「前腕」「上腕」「三角筋」「咽乾」、定型句「宝の持ち腐れ」「お茶の子さいさい」「二の足



を踏んだ」, 諺「豚に真珠」「知らぬが仏」のみならず, 引用句「書物をしょってるロバ」(『コーラン』より)「諸行無常の響きあり」(『平家物語』より)「あいつらを掃滅せねばならぬ」(『我輩は猫である』より)が脳裏に焼き付く。「盲想」「ちぎり殺す」は, アブディンによる造語である。

8. 同音異義語や類音異字語を使って, おやしギャグ(洒落)を発すれば, 機知に富む会話を愉しむことができる。例えば, 「頭を使うから糖分も必要でしょ」に対して, 「当分の間はね」と返すのである(本書 p. 117)。相手が笑わなければ, それまでだが。
9. 母語はアラビア語であるが, 第二言語である日本語の方が書く力は上である(本書 p. 196)。実際, 2点の著書『わが盲想』と『日本語とにらめっこ』は日本語で書いた。論文も軽妙なエッセイもほとんど日本語で書いている。著者はスーダン出身のイスラム教徒ゆえ, お酒の話や政治・戦争の話などは, 日本語だからこそ書けるが, アラビア語では書けない(p. 197)。著者の属する文化圏や国によっては, 触れてはならない話題があるのだ。

以上, 本書を通して, 盲人モハメド・オマル・アブディン(1978年, スーダン生れ)は, 19歳で盲学校への留学のため来日し, 刻苦勉勵の末に博士号を取得し, 日本語の豊かな担い手に変身したことが分かる。この日本語学習奮闘記からは, 第二言語習得論や日本語教育にさまざまな示唆が得られる。例えば, 適切な言語環境が言語習得を促進させる。本人の学習意欲と向学心も重要な習得因子である。ひたすら録音図書で「読書」すれば, 漢字の障壁は乗り越えられる。パソコンとソフトを活用すれば, 盲人であっても自由自在に書けるのだ。

アブディン君の日本への留学は特異な道を辿った。いきなり、日本人のみの環境に放り込まれて、鍼灸マッサージという分野の勉強を地方都市福井で始めたのである。このような経験は異例である。というのも、一般的な留学は、まず日本語学校に1～2年通ってから大学か専門学校に進学するからである。留学当初における生活の場が、寮とホームステイであったことも彼の日本語習得に幸いした。毎土曜の親切な個人指導により、アブディン君の日本語能力は飛躍的に向上した。そのおかげで、日本語学校に通うことなく、盲学校の3年間で日本語能力試験一級に合格したのである。筑波技術短期大学時代には、情報リテラシーの基本を身に付けたが、この能力が東京外国語大学での学びに役立った。

「アブディンさん」の文章に惹かれた河路先生は、「さまざまな文体を使いわけて、書きことばの中に話しことばを入れ込む機微、巧みな緩急、歯切れのよさ、つつこみに関西弁や得意のおやじギャグが入ったり、日本語の表現が魅力的です。」(本書 p. 196) と評している。ある分野の語彙・表現を別の文脈で使って、新鮮な視界を切り拓くのが、彼の真骨頂である。

2014年に上梓された『わが盲想』の「おわりに」の中で文筆家アブディンは語る。「この15年間の日本生活は、新しい発見と自らの再発見に満ちたものでした。」その7年後に出た本書『日本語とにらめっこ』は、日本語習得に関する新たな発見と日本語再発見に満ちている。この巧みな文章術を駆使して、『スーダン現代史—挫折と希望の三十年』とでも称せられる著作が上梓される日を待ちたい。

来日直後のアブディン(19歳)に協会理事長がいみじくも諭したように、“Where there is a will, there is a way.”(意志あるところ道あり)である。その道は万人の前に用意されている。万難を排しても進む意志と勇気がある人間のみが辿るであろう。